

## 沖繩語における「語の活用」

大津不二也

印欧比較言語学者は、原始印欧語の推定に従事し、その古代の姿を描き出すことに成功したが、その資料が或る時期には非常に豊かであり、他の時期には全くなく、或は一つの地域では全くないと言ふような内部事情に規定されて、その言語活動は最も抽象的にしか明かにされなかつた。

言語の実体へ、より近付こうと努める限り、相互比較のために用いられる言語資料が各々水準を同じくし、それをを用いる人・時・所の明かな、言い換えると諸条件の大体整うことが必要である。

印欧比較言語学の結果に対する反省の上にロマン語比較言語学は、その研究領域を狭げ、これを構成する諸語各々のうちの、特に地方言語事実の研究に移った。これは、言語の実体へ近づく諸条件を相当に充たしてくれるものであった。もちろん、地方言語事実の研究は、方言研究の名のもとにあつた。ところが、実証的研究を目指す、フランス学派ジュール・シリエロンは、現在の方言活動を一部分ずつ解決し、やがて言語の実体を明かにして行く研究（言語地理学と称せられた。）を始めた。これは、現在の地方言語事実を、言語の史的発展の一断面と解し、事実の告げる所に従つて、この断面の様相に適當な解釈を加えることであつた。

沖繩語における「語の活用」

彼は、語・語法・形式の各々を、その研究の主題として図示するに當つて相當広い地域を調査範圍とし、選ばれた地点で選ばれた語を調査し、「フランス言語図巻」を作つた。

そして、語彙の語形或は音韻の地理的分布から結論を引き出すに當つて、一般の地質学が地球の過去の諸時代の歴史を、岩石と岩石中に含まれる化石の研究によつて明かにしようとするように、言語の過去の諸時代の歴史を現在の語の分布状態の觀察によつて明かにし何故現在のこの不統一な状態に到達したかを明かにしようとした。

そして、この分布状態を解釈しようとするに當つて、次の原則を挙げてゐる。

一、同一の事物（或は概念）に対する若干の称呼を比較して、或る称呼が他のものに対して孤立した分布を示す場合には、孤立した分布状態にある称呼の方が他のものに対して時代が、いつそう先立つものである。

二、（一）の場合には具体的には屹々中央内側面と外側面の関係で示されて、外側面をなす称呼は内側中央面をなす称呼に比して時代が、いつそう先立つものである。

三、(二)の場合において、逆に分布状態からみて外側面をなす称呼より内側をなす称呼の方が時代がいつそう先立つものもある。

四、一つの広大な面の内小さくぼつりと現われている面をなす称呼はこれを取り囲む面をなす称呼より時代がいつそう先立つか或は反対にそこに新に偶発して来たものかである。シリエロンは、

(二)の形を重要視すべきであるとして、これを根幹として理論を展開している。そして、「木材を挽く」を意味する語の分布について具体的に説いている。詳説することは省略するが、史的言語学において文献資料が整った条件の下に置かれない場合に、その言語の地方言語事実の分布を時代的に解釈する言語地理学の方法は、史的言語学を更に展開せしめることとなったと言えよう。

「フランス言語図巻」のような整った条件下にはないが、文献資料に恵まれない沖繩語の史的 연구に当って、文献資料の外に、比較的豊富な地方言語事実の分布に対して言語地理学的解釈を施し、「語の活用」の史的研究を試みたい。

1、引用について

- ・本論においては、次の書によった。
- ・「おもろさうし」：第一は西暦1532年、第二は613年、第三―第二十二は1623年の結集、十二世紀中葉―十七世紀中葉の五百年間の「おもろ(神歌)」155首を収録(重複があるので約115首)している。
- ・「語音翻譯」―チョウセン人申叔舟著「海東諸国記」の付録。
- ・1501年のものと考えられ、シナ語の語句や文を掲げ、その下に、これに相当する琉球語を諺文(チョウセンの表音文字)で記してある。

る。本論では、印刷の関係上、筆者が仮名に書き換えて、引用した。平仮名は、日本語と同じ音節を表わし、片仮名は、音節の母音が日本語の母音と異なる母音を含む音節を表わすものとした。

2、音韻組織について

古くは、*a i u e o*の五母音。現在は*a i u*の三母音(しかし、*e*も少数の語には用いられ、*o*も鼻音の前に現われる)。外に、*ê*(*ai*)、*ô*(*au*)。小幡重一氏の研究によれば、*e*は*i*に近く、*u*は「う」と「お」との中間音。(伊波普猷著、「南島方言史故」P.22参照)。

*e* *l* *i* (奄美大島本島を中心とする沖繩語圏の多くでは*i*となる。)の結果、在来の子音は口蓋化する。(「*chin*」毛のように)。先島(宮古・八重山)では、口蓋化は現われな。又、*o* *l* *u*となり、口蓋化する。「*ichun*」(行く) *muku*。先島では口蓋化しないで、*u* *l* *w* *l* *i*となる。「は」行音の子音は、先島では*P*となり、その他では*F*。*w*・*y*に対して、先島では*b*。語間の*ru*は、*yu*となるが、宮古では*li*、八重山では*ru*。*su*は、宮古では*si*、八重山では*sw*。その他は省略。

3、名称について

本論では、古代沖繩語に琉球語、現代沖繩語(琉球王国時代の王府の所在地首里の言語の伝統を受け継ぐもの)に沖繩語の名称を与えた。

本論

(一) 沖繩語の動詞の活用をみよう。

未然形

連用形

終止形

連体形

仮定形

命令形

1、 ツラ

ツイ

ツゆん(取る)

ツゆる

ツリ

ツリ

2、 かか

かち

かちゅん(書く)

かちゆる

かき

かき

活用語尾

く a

く i

く u+n(↑m)

く u+ru

く i(↑e)

く i(↑e)

(注) 平仮名は、日本語と同じ音節を表わし、片仮名は日本語と異なる母音を持つ音節を表わす。

3、 あら

あい(↑あり)

ああん(ある)  
あゆん(文語)

あゆる(文語)

あり

あり

活用語尾

く a

く i

く un(↑m)  
く u+n(↑m)

く u+ru

く i(↑e)

く i(↑e)

活用語尾の最後の音だけについてみると、a i u n の四つに変化する。

この活用形式を、沖繩語四段活用と仮称する。

4、 さ

し

しゅん(する)

しゆる

シ

シ

活用語尾

く a

く i

く u+n(↑m)

く u+ru

く i(↑e)

く i(↑e)

活用語尾の最後の音だけについてみると、a i u n の四つに変化し、沖繩語四段活用をなす。

5、 く

ち

ちゅん(来る)

ちゆる

ちゅり

く

活用語尾

く u(↑o)

く i

く u+n(↑m)

く u+ru

く u+ri(↑re)

く u(↑o)

活用語尾の音だけについてみると、i u n の三つに変化し、未然形・命令形において、沖繩語四段活用から取り残されている。

6、 わしら

わशी

わしゅん(忘れる)

わしゆる

わशीり

わशीり

活用語尾

く a

く i

く u+n

く u+ru

く i(↑e)

く i(↑e)

沖繩語における「語の活用」

7、 $\sim$ んだ(↑みら)  
\*↑みら) みー みゆん(見る) みゆる みり んヂ(↑みろ)  
\*↑みら)

活用語尾 } a } i } u+n } u+ru } i(↑e) } i

6・7 共に、活用語尾の最後の音だけについてみると、a i u n の四つに変化し、沖繩語四段活用をなす。一段活用に属する語に当る語の活用が直接に沖繩語四段活用を取ることは困難と考えられ、おそらく「ら」行四段活用のような段階を経たのではなからうかと思ふ。

〔ここに、後述の「おもろさうし」の用例、琉球と関係の深かった九州方言における「蹴る」「見る」などの「ら」行四段活用化などが、想起される。〕

沖繩本島の南、八重山群島との間にある宮古群島の宮古本土方言における語の活用をみよう。

一、 あシば あシび  $\sim$ あシビ(遊ぶ) あシび  $\sim$ あシびむ あシび あシび

活用語尾 } a } i } i(↑u) } i(↑u)+m } i(↑e) } i(↑e)

二、 シな シに シにり(死ぬ) シにり シにり シにり

活用語尾 } a } i } i+li } i+li } i+ri(↑re) } i(↑e)

(注) li は、沖繩語の ru、i-w の対応である。

e ↓ i は、沖繩語圏における音声変化であるので、ri は re、i は e を前段階と考えることにする。

以上の場合、活用語尾の最後の音だけについてみると、a i i 或は m の三つに変化する。沖繩語「あん」に対しては、「居る」を意味する語「うり」を用いる。

三、 うら うり  $\sim$ うり(居る)  $\sim$ うりむ うり うり うり

活用語尾 } a } i } i+m } i } i(↑e) } i(↑e)

活用語尾の最後の音だけについてみると、a i i 或は m の三つに変化する。

従って、日本語の四段活用に属する語に当る語の活用は、宮古本土語三段活用をなす。これは、沖縄語四段活用に対応するものである。

四、  $\overbrace{\text{し}}^{\text{す}}$  し  $\overbrace{\text{シ}}^{\text{する}}$  シー シシ しーる

活用語尾  $\overbrace{\text{し}}^{\text{す}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{m}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{i}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$

(注) 命令形の語尾「る」は助詞と考えられるので、「る」を除いて考える。

活用語尾の最後の音だけについてみると、i i 或は m の二つに変化し、未然形において特殊な形を残している。

五、 く  $\overbrace{\text{きシ}}^{\text{来る}}$  キシ  $\overbrace{\text{きシ}}^{\text{来る}}$  キシ く

活用語尾  $\overbrace{\text{く}}^{\text{す}}$   $\overbrace{\text{u}}^{\text{shi}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{si}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{shi}}$   $\overbrace{\text{u}}$

以上のように、活用語尾は複雑な形を持つが、活用語尾の最後の音だけについてみると、i u i 或は m の三つに変化すると言えよう。しかし、未然形・命令形に特殊な形を残している。

要するに、「さ」行変格活用や「か」行変格活用に属する語に当る語の活用は、宮古本土語三段活用には程遠く、「さ」行変格活用や「か」行変格活用に近いものを残していると言える。

六、 みー みーり(見る) みーり みーり

活用語尾  $\overbrace{\text{み}}^{\text{i}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{li}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{ri}}$   $\overbrace{\text{i}}$

(注) 命令形の語尾「る」は、助詞と考えられるので、除いて考える。

七、 シチ  $\overbrace{\text{シチリ}}^{\text{捨てる}}$  シチリ  $\overbrace{\text{シチリ}}^{\text{捨てる}}$  シチる

活用語尾  $\overbrace{\text{シチ}}^{\text{る}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$   $\overbrace{\text{i}}^{\text{e}}$

(注) 命令形の語尾「る」は、助詞と考えられるので、除いて考える。

以上のように、活用語尾の最後の音だけについてみると、六・七の活用は i i 或は m の二つに変化すると考えられる。

沖縄語における「語の活用」

以上のように、宮古本土方言においては、一つの活用に統制せられず、終止形・連体形において特殊な活用語尾を持つが、日本語の口語の動詞の活用の種類（日本語では、五種であるが、沖縄語圏では e・i のため、上一段と下一段とが同じくなり、四種である）を反映している。しかも、宮古の終止形の活用語尾「む」は、沖縄語の終止形の活用語尾「ん」の前段階を残している。このような姿が、沖縄本島から離れた外側面にあることは、注目されよう。

十六世紀初め頃の琉球口語を写したと考えられる「語音翻譯」に

(一) 日本語の形容詞・形容動詞に属する語に当る語の活用をみよう。

奄美大島 本島名瀬	しだく	しだしや(下略形)	しだしやり(涼しい)	しだしやる	しだしやり
宮古本土	しだーシフ	しだーシ(下略形)	しだシツアリ	しだシ	しだシかり
八重山	—	しだっさーり	しだっさーる	しだっさーる	しだっさーり
沖縄本島 首里	未定形 自然形	しだしやり	しだしやる	しだしやる	しだしやり

(注) この表は、国文学研究第四号「国語と沖縄語との関係」十  
九頁に掲げたが、小生の校訂の手落から脱字がありました

ので、訂正させて頂きたく、用例として再び掲げました。  
「り」は、ri を表記したもの。「シ」は si を表記したもの。八重

- よると、
- 1、御親父有りや。—うらあしやあり。
  - 2、酒有り。—さキあり。
- 「あり」は、疑問形「ありや」の転訛形で、終止形は「あり」（伊波普猷著、「南島方言史攷」P. 53~60参照）。「さキ」は、e・i の動揺を感じしめる。
- 3、一杯上げよう。—さキわかシ。「わかシ」↑「わかせ」。e・i 或は e・i を感ぜしめる。
  - 4、酒を注いで来い。—さキわかチく。|。「く」は、日本語の命令形「こよ」の o・u に伴う転訛と考えられる。

山の「り」は、沖繩の ri に対応する。

詳述ははぶくが、沖繩本島・八重山では、「くざ」「くしゃ」を語幹として、沖繩語四段活用・八重山語四段活用をなす。

沖繩語圏でも、奄美大島本島・徳之島では否定形くku、連用形下略形即ち語幹、終止形くri、連体形くn、仮定形ri(↑re)となっているが、未然形を除いて奄美大島本島語四段活用に統制される傾向にあると言える。宮古群島では本土方言にみられるように、否定形「くfu」の形は、奄美大島本島の「く」と関係があり、その転訛形と考えられ、その他は語幹に助詞・名詞・動詞が付いたものと考えられ、活用していない。このような姿が、沖繩語圏の外側に存在することは、注目される。

形容動詞に属する語に当る語の活用も、形容詞の場合と同じである。活用表は省略するとして、終止形を挙げる。「哀れだ」を意味する語は、

沖繩 [ちむぐりしゃん 八重山 キむいたさーり  
ちむぐりしゃん]

宮古 つむだらさ 奄美大島本島 きむちやげさん

沖繩語  
活用語尾

前掲の「語音翻譯」から、語を拾うと、

酒が過ぎる。ーうフシ。顔が赤い。ーつらぬあけさ。

顔が白い。ーつらぬしるさ。酒無了。ーさキネ。

その外、「この人は心が好い。」の「好い」が「ゆたしゃ」、

沖繩語における「語の活用」

「この人は心が悪い。」の「悪い」が「わるさ」、緩和ーぬくさ、天熱(暑)ーあくさ、涼快ーすださ、甜(甘さ)ーあみさ、酸ーすいしゃ、淡ーあふあしゃ、鹹ーしふからさ、疎ーからさ、等の中に、「苦ーにがし」が、みえる。又、小路ーくーみち、清酒ーゆかさキ、等。

(注) 資料は、伊波普猷著、「南島方言史攷」P. 37  
印刷の関係上筆者が仮名に書き改めた。 P. 125によった。

以上によって知られるように、琉球王国では、連用形は「くく」終止形は「くし」の形が用いられたが、終止の場合でも、「くさ」「くしゃ」の形が又語幹が有力であったことが推測される。「語幹」の用例は、後述の「おもろ」の中にみられる。』。

伊波普猷氏によると、「ネ」は「ない」、更に遡ると、「なし」を予測せしめる、現在、これに当る語は、「ねーん」又は「ねーらん」と言う、「ねーん」の古形は「ないぬ」で、短歌などでは、「ないぬ」又は「ないらぬ」と表記されている、この「ん(↑む)」は、一般の終止形の語尾「ん」を付けたように思われるが、この「ん」は、「あらん(有らず)」の類推で、打消の助動詞「ぬ」の転訛形「ん」を付けたものである、「ねーらん」は、後に発達した形で、やはり「あらん(有らず)」の類推で「らん」を付けたもので、これらは二重打消の形で、論理と語法とが一致しないが、現実には用いられている。「南島方言史攷」P. 57参照) 53  
しかし、後に出来た「ねーら」は、非存在を表わす語「ねーん」

の未然形と考えられないこともないようにも考えられる。

「ゆかさき」の「ゆか」は、その前段階に「よか」を予測せしめ、「よか」は「なか」と共に九州方言として、殊に南部においては現在盛んに用いられる。例えば、「よかにせ」、「よかいしよ」、人物がヨイ。ソソ 青年 ヨイ 衣裳し暗し著

「ひとがよか。」「そげんなよかしぢぢや などが。」「などのように、連体形にも、終止形にも用いられる。

従つて、琉球王国における「ゆか」は、九州方言の影響によるもので、後にo↓uの音質変化を受けたものであろう。

「おもろさうし」から、動詞を拾うと、

心 強ク ホントニ アレ。

1、あよ、ちよく、げに、あれ〔第一(三三)〕

中城 ニ アル (浦↓島中ニ 警ク 鼓ヲ打ツテ

2、中ぐすく、あつる うらとよむ、つごみ、うちへ、

マスマス鳴ラセ。

なりあがらせ〔第二(一一)〕

越来(地名) (世ノ主)領主↓妃ガ 恩イ 子ヲ 産マセ給ワタ。

3、ごゑく、世のぬしの またちよもい、なしよわちへ

コレハ 果報ノオ日様ダ。 越来ノアルダロウ限リ (注) イマセ。

これど、かほうてだ ごゑく、あらぎやめ、ちよわれ〔第三(三八)〕

(注) 尊敬の動詞の命令形である。「なしよわちへ」の「よわ」は補助動詞として用いられ連用形の下略形。

貴イ (大君)王ガ

4、きこゑ、大きみが、しまうちとみ、おしうけて

浮カベ テ (大空) かがら

、タヨリし天カラ降りテ来タト思ワレル ヨウニアル。 の、てより、とみる、かにある〔第十三(百一八)〕

5、……………ほこる、て、げに、あり そこる、て、

ホントニ アル。

げに、あり〔第一(四〇)〕

チヤノモイ(至名)ガ 謝名 上原ニ登ツテ 躡上ゲタ 露ハ、

6、ぢやなもいが、ぢやな、うへばる、のぼてけやけたる、つよは

歸 デサエ カンバンシガアル。

つよからど、かばしや、ある〔第十四(一一)〕

首里 タチヨモイハ 若イ オ日様ゾ。 君々ニ(世)セヨ。

7、首里、たちよもいや わか、てだそ きみくにせれ

〔第五(一七)〕

(注) 「する」を意味する語「しゅん」「しゅゆん(文語形)」の命令形であると考えられる。

佐敷 苗代(地名)ニ 軍勢ガアルダロウナラバ 今

8、さしき、なわしろに せあらは けお、

隊ヲ整エルコトヲシヨウニ

くなべ、せらに〔第十九(二七)〕

(注) 「する」を意味する語の未然形と考えられる。

9、としの、はぢまりに ゆはい事、すれば……………〔第五(四二)〕

(注) 「する」を意味する語の已然形と考えられる。



10、大ぬしぎや、天とゞろするやに へげ、せちまきて、  
イヤセ。

ちよわれ〔第十(一)〕

11、中ぐすく、よしのうら けよ  
中城 ヨシノ 浦 ヨシノ 浦 ノ メズラシヤヨ 今日  
カラ シハンバ(注) 見ヨウニ

から、しばへ、みらに〔第二(二〇)〕

(注) 「見る」を意味する語「みゆん」↓「ぬーん」の未然形  
で、日本語の「見る」を意味する語の活用が「ら」行四段  
活用のようなものであったことを推測させる。

12、天にとよむ、大ぬし さいわたり  
天ニマデ鳴リ響ク (天主)王ヨ。(夜明ケ ノ 花)朝日ノ (候キワタル)↓  
天にとよむ、大ぬし あけもどろの、はなの

一面ニ置イテイル。アレヨ(注) 見ヨ。 美シイコトヨ。

あれよ、みれよ さよらちよ〔第七(三五)〕

(注) 「見る」を意味する語の命令形で、日本語の「見る」を意  
味する語の活用が「ら」行四段活用のようにだったことを推  
測させる。

13、おやのろ、キコエ大ギミガ 神ヲ  
親祝女 天カラ降りテ オモロニ合ワセテ敬舞シ給ウノデ 神ヲ  
きこゑ大ギミギヤ おれて、あすびよわれば かみ

アルオ日様ガ 守リ (領王)治メルモノ(王)ヨ。  
てだの、まぶり、よわる あんじ、おそい〔第一(二)〕

14、おくらつが、ふなやれ げらい、まぶりとみ おしうけ  
オクラツ(人名)ガ 船ヲ走ラセヨ。(作ル)立派ナ スグレタ船ヲ(注) 浮カベルダロ

沖繩語における「語の活用」

ウナラバ 鳥ヨ (君臨セヨ) 見守リ給ヒ。  
らは しまよ、ふさよわれ〔第十三(三)〕

(注) 「おしうける」を意味する未然形で「ら」行四段活用のよ  
うな活用をなしていることが推測される。

15、ほこり、ころかまが しまとつけ、からへて  
ホコリ コロカマ(人名)ガ シマトツケ(船名) ヲ 作ツタ。  
出掛ケルダロウ(敷)ダビニ (船ヲカケテ)帆ヲ張ツテ走ラセヨ。

いでらかず そでたれて、はりやせ〔第  
十三(第十三三三)〕

(注) 日本語の「いづ(出づ)」を意味する語を「ら」行四段活  
用のように活用させた、未然形と考えられる。

16、おれらかず まぶら あすばかず、  
神ガ天降リサレルダロウタビニ (守ル)ダロウ(守)リ下サイ。 神ガ託遊スルダロウタビニ  
(愛撫)スルダロウ(愛撫)シ下サイ。

かいなでら〔第二十(四四)〕

(注) 「ら」行四段活用のように活用した語の未然形と考えられ  
る。

17、ぎのわんの、てだの よほし、みね、ちよわちへ  
宜野濟 ノ (オ日様)祝女ガ ヨホン 嶺ニ イマヌ ノデ

大田(地名) (へ)向カツテ 見テオリマスト 稲 ノ 寄リ ナヒ  
大た、かち、みよれば しろちやねの よりなび

く、 きよらや〔第十五(五二)〕

親祝女キコエ大ギミヨ。 コノ國ヲ 治メル (皇主ヲ治メル)

18、きこる大ギミギヤ 者シ 王ノ名ヲドコロカセ。 ぢやくにや、世、そゑる。 あんじおそ

いしよ、とよめ〔第一(三三)〕

親祝女ナオヂキヨガ 首里(へじ)向カツテ 来ルノデ (高し)國 広ク

19、なおち、きまが (注) しよりかち、くれば しま、ひろく、

國 広ク 支配シマセ。 くにひろく ちよわれ〔第五(五五)〕

(注) 引用の「おもしろは、行分けになつてゐるが、ここでは二字あけた所の次を行の始まりとする。原文の右側に大体の意味を付けたが、不明なものもある。ご教示を乞ふ。

連用形・已然形或は仮定形は、下略形即ち語幹を用いることが、普通である。

以上の用例によつて、十五世紀末から十七世紀の初め頃までは、語の活用も日本語の活用と同じようなものであつたようであるが、段活用に属する語に当る語の活用は、一段化の段階で「ら」行四段活用に似た活用形式を取る傾向が生じたようである。

形容詞・形容動詞に属する語に当る語の活用形を、「おもしろ」から拾うと、

- 1、あよ、ちよく、げに、あれ〔前出〕
- ユダイキヨ (名)ガ 神歌ハ立派ダ。 英祖王 子孫 (オ日様シ)王ノ
- 2、ゆだいきよが、おもしろ ゑそにや、すへ、てだが、

(内シ)御殿内デ 國 広ク 在位 長ク イマセ。

3、天にとよむ、大ぬし うち 世、ひろく世、ながく、ちよわれ〔第五(一四)〕 あけもどろの、はなの さいわたり

あれよ、みれよ (注) きよらやよ〔前出〕

(注) 形容詞に属する語の語幹と考えられる。

4、中ぐすく、よしのうら 中 よしのうらの、めづらしや けよ

から、しばく、みらに〔前出〕

5、すぎべ、大ざとが 兄 大里ガ 榊ヲ 取ツタ (細カサシ)立派サヨ。 かぢ、とたる、こまかさよ。

大君(祝女名)ニ (喜)南風ヲ 乞ワテ 帆ヲ張ロウヨ。

大さみに まはへ、こうて、はりやに〔第十三(五)〕

6、ぢやなもいが、ぢやな、うへばる、のぼてけやけたる、つよは

つよからど (注) かばしや (注) ある〔前出〕

(注) 「くしや」に「ある」を付けた用例は、「おもしろ」約千首五十首の中に一つある。

7、あか、わりぎや、おもしろ アカ ワリ(人名)ガ 神歌ハ立派ダ。 (ロシ)子言ハ (スケレテイル)コトシ くら、まざしや、

ヨク当ルコト (注) アルヨ。 千年 オガミ 羅キオルダロウ。

五(四二) (注) 「あ」は6の「ある」の下略形と考えられる。

親姫女キコエ大ギミガ 今日降ラス 雨ハ 京ノ  
8、きこゑ大ギミギヤ けよふらす、あめや きやの、

内宮(曾里城内ニアル)ニ 黄金トナツテ降 満チヨ。 名高ノ高イセダカ  
うちみやに ことがね、ふり みちへて とよむせだか

コガ……。 今日ノヨイ日ニ……。 今日ノコノヨウナ日ニ……。  
こが けおのよかるひに けおのきやかかるひに 〔第一〕  
九) 〕

(注) ……の所は、「きやの……みちへ」を繰り返すものと考  
えられる。

貴イ クニナオリ(職名)ガ 入ツテ 水ヲゴト、 水ハ ナイ。  
9、きこゑ、くになおり いらて、みづこゑは、みづなきやん、

(惠) 酒ヲ出ス (美) 園ダ。  
まみき いぢやす、まくに〔第十四(六二)〕

10、……むかしから いくさかぢよくの きちやることは  
軍隊・海賊 ノ 米 タ コトハ

ナイ モノデアルガ、 王ノ御留ハ 国ノ用事ノタメニ  
なきやものやれども、御世の御さうせ 国のようにのために、

サア 大車ナコトガ アルダロウ時ハ……。  
いなやてゝ いよことのあら時や、……。

〔やらぢもり城(すく)碑文、十六世紀の半ば尚清王が倭寇を防ぐため  
砲台を築いた時に建てた碑。〕

(注) 濁音を清音で写した所もあるが、原文のままとした。

以上のように、「くく」、「くさ」、「くしゃ」、語幹が多く用

沖繩語における「語の活用」

いられている。文の終止に用いられるのは、「くさ」、「くしゃ」  
の形が普通で、その外に語幹に感動の助詞を付けて用いられる。

日本語では、「くさ」の形を名詞形として、又形容詞の終止形と  
して、語幹を終止形、連体形として用いる。

6・7の用例が、「くさ」・「くしゃ」の形の名詞に「存在」を  
表わす「あん」の連体形「ある」或は連用形「あり」の下略形(語  
幹)「あ」を付けた形を取っているが、このような用例は稀であ  
るが、このようなものが融合して一語となり、「くさ」「くしゃ  
」を語幹として活用するようになったと考えられよう。これが一語  
として活用するようになった時期を明かにすることは困難である。

しかし、「おもしろ」の第三回目の結集が1623年であること、十六世紀  
初め頃の琉球口語を写した「語音翻譯」の例などから考えて、十六  
世紀半ば頃から後のことではなからうか。

8の「よかる」は、九州方言の「よか」と関係があると考えられ  
る。九州方言の「よか」・「なか(無い)」は、終止形・連体形に  
用いられる。

「おもしろ」の「よかるひ」の「よかる」、「語音翻譯」の「ゆか  
さキ(清酒)」の「ゆか」は共に連体形であり、9の「なきやん」  
は終止形、10の「なきやもの」の「なきや」は連体形である。ここ  
で、終止形の活用語尾「ん」、は連体形の活用語尾「る」につ  
いて考えてみたい。

伊波普猷氏によれば、

△「なきやん」は、九州方言の「なか」の転訛したものに、否定

辭「ん」の付いたものである。かういふのは、金石文中にも見出される。嘉靖二十三年に建てられた、やらぎもり城の倭寇碑中に、「むかしから いくさからよくのまぢやることはなきやものやれども云々」と見えてゐるが……「なきやもの」は「なかもの」の転訛したものである。V〔「南島方言史攷」P. 90 参照〕九州方言で、「なかもの」とは言うが、「なか」は連体形であつて、未然形に用いることはない。

又、同氏の「よかる日」の「よかる」の活用語尾についての説明を見出すことはできない。

又、「なきやん」の終止形、「よかる」の連体形の用例しか見当らず、又「なか」、「よか↓ゆか」の連体形の用法がある。

そうすると、「なきやん」「よかる」は、琉球が、その言語意識に基付いて、更に終止形活用語尾・連体形活用語尾を付けたとも考えられる。

(三) 以上、日本語の動詞・形容詞・形容動詞に属する語に当る語の活用が、沖縄語で大体において沖縄語四段活用形式 (aiun) に統制されたことを逆視的に見て来た。先ず、沖縄語圏諸島語の地方的言語事実の分布に解釈を施すと共に、恵まれない、琉球語資料の中の「語音翻譯」(十六世紀の琉球口語の見本、外国人の採録したもの) のなかで、比較的音声變化の少ない諺文で写されている。「やおもろさうし」(西曆十二・三世紀に遡ることが出来るだらう。) によつて、琉球語の状態を見た。

今、この琉球語から、現在の沖縄語に至つた過程を推測しよう。

十六世紀初め頃までは動詞に属する語の活用は、現在の宮古本土方言に見られるように、日本語と同じく四段活用・変格活用・一段活用のようなものを持つたが、「さ」行変格活用や上・下一段(下一段は、後に、↓iの變化を受けることになる。) 活用に属する語に当る語の活用が「おもろ」の用例に見られるように「ら」行四段化の傾向を生じ、奄美大島本島語の活用形式の段階を経て、沖縄語四段活用形式に統制されたと考えられる。

しかし、形容詞・形容動詞に属する語の活用は、後れて沖縄語四段活用形式を取るに至つたと考えられる。

現在、沖縄語圏でも、沖縄語の終止形活用語尾「〜ん」、連体形活用語尾「〜り」に対して、奄美大島諸島語の多くは終止形活用語尾「〜り」、連体形活用語尾「〜ん」である。しかし、沖縄本島に近い沖永良部島語では、終止形活用語尾、連体形活用語尾は沖縄語と同じである。沖縄語と奄美大島諸島語における、この相違は、政治行政的な事の他に、九州と琉球王国支配の沖縄諸島との間に介したことによると考えられる。これは、宮古群島の語の活用と考えると、琉球語の残存を考えさせるものである。

なお、沖縄語の終止形活用語尾「〜ん」が、前段階において「〜む」であつたことは、例えば「ある」を意味する語の疑問形「ありいみ」となっていることから明かである。しかし、「語音翻譯」の用例のように、十六世紀初め頃は「あり」であつた。

ここに、終止形活用語尾「〜り」から「〜む」への転訛を考えざるを得ない。これについては、説明が困難であるが、金田一京助氏の日本語における「撥音と母音との相通」は、示唆に富むものであ

る。

〔国語の「う」は唇のつまみがなく、舌の上りも凡帳面でないものだから、**n**でも**m**でも〕でも、鼻への道を塞げば、おきにそれに成れるからで、「無からん無からん」などを吟咏するのを聞いていると、声を長めるにつれて、この「ん」の末がおのずから「う」になつてゐるものである。「う」と「ん」との交替の可能が、そういう所にも領けるのである。要するに、相近くして容易に交替する音だと言ふことは言へよう。√〔金田一京助著「増補国語音韻論」昭和十年、刀江書院 P.227—229 参照〕

沖繩語圏では、語間の「ら」行音の子音 r の脱落は有力である。そうすると、活用語尾「**ri**」、「**ru**」の r の脱落、「撥音と母音との相通」などによつて説明されるように考えられる。

17年の「混効験集」（一名内裏言葉）の時代には、これらの語を理解することが困難になり、王府に三代に亘つて仕えた女官に質しながら収録されたと言うから、十六世紀には相当な言語変化があつたと考えられる。

琉球史によれば、尚巴志は1429年三王国（三山）を統一し、明国並びに室町幕府との関係を持つに至つた。しかし中央集権が確立したのは尚真王の1476年である。そして1589年尚寧王の時代に島津氏に征服されている。

「おもしろ」にも、京・鎌倉が歌われている位であるから、十五世紀中頃から日・琉交通も盛んになつたと考えられ、もともと同源である琉球語への日本語の影響も相当あり、又地理的關係から、又島

沖繩語における「語の活用」

津氏との關係から、九州方言の影響も大であつたと考えられる。

しかし、沖繩語における「語の活用」の一元化傾向は、琉球王国を中心としての政治・文化圏の確立に基づくものと考えられる。

従つて、相当な言語変化は、琉球王国において中央集権の確立した十五世紀末か十六世紀初頃に始まり、現在の姿に近付いたものと考えられる。

本論は、左記の著書所載の資料に負う所多大である。ここに感謝の意を表する。

伊波普猷校訂、校訂おもしろさうし 一・二・三

大正十四、郷土研究社

伊波普猷著、古琉球、大五、丸善株式会社

琉球古今記、大一五、刀江書院

孤島苦の琉球史、大一五、春陽堂

南島方言史攷、昭九、楽浪書院

宮良当壮著、八重山語彙、昭五、東洋文庫

与儀達敏筆、宮古島方言研究、昭九、春陽堂「方言」

第四卷・第十号

伊波普猷監修、A Hand-book of the

Luchuan language, Maruzen, 1916

東条操編、南島方言資料、昭五、刀江書院

「奄美大島方言と土俗」の新屋敷幸繁氏よりの資料

伊波普猷著、琉球の方言（国語科学講座第五回の内）、

昭八、明治書院